

クラシック音楽の作曲家や演奏家、愛好家の方々は口を揃えてこう言います。

「弦楽四重奏を書くことが一番難しい」

かつて作曲家のベートーヴェンが、同じ作曲家ハイドンの弦楽四重奏を写譜しているうちに弦楽四重奏が書けるようになっていったと言っていたらしいです。

さて私の弦楽四重奏曲、よく書けているのか書けていないのかはよく分かりませんが、私にとってはギター一本で歌うブルースも、100トラック以上使って構築するチェンバー・ポップも、書くのは全部難しいです。

昔ギタリストのジミー・ペイジが言っていた言葉で、「ギターは小さなオーケストラ」という言葉があります。まさに弦楽四重奏が「室内楽に適した小さなオーケストラ」であることに符合するのではないかと合点がいきました。

私の書いた弦楽四重奏曲はどの楽曲もベートーヴェンのそれなんかとは全く違うスタイルのもので、私はいわゆる音大教育を受けていない作曲家なので所謂クラシカルなものとは発想も出来栄も異なることでしょう。ただ、私が好きなベートーヴェンやバルトークは勿論、ラヴェルやドビュッシー、フォーレやサティといったフランス印象派以降の響きや和声進行に大きくインスパイアされています。

しかし、私はクラシック以外の音楽を、クラシックスタイルに昇華させることが私の何よりの命題であり興味の大きなポイントです。よくある「クラシック+何某」ではない何かをずっと探しています。

アイリッシュのホロやジグ、ナポリの古い民謡、北欧のフォークロアは私の音楽嗜好には欠かせないものです。ブラジル音楽の豊かなリズムと豊潤な和声もまた然りです。ライヒやグラスなどのミニマル、すぎやまこういちや植松伸夫などのゲーム音楽、エイフェックス・ツインやクラークなどの電子音楽、DJ シャドウやノーマン・クックのサンプリング音楽、レッド・ツェッペリン、メタリカ、レノンとマッカートニーも私の音楽の礎です。

私は、弦楽四重奏曲への取り組みによって、2025 年型の文化的 / 地政学的多様性を掘り下げ、学閥やあらゆる派閥とは異なったポイントから、あまねく音楽の歴史や構造を楽しみ、自身の制作に取り組んでいます。これらの作品は私の音楽制作の原点であり、これからも日々の精進を忘れないように音楽道に邁進する次第です。

岸田 繁